

『恋多き公爵アルファとの偽りの甘やか婚』

著：葵居ゆゆ

ill：篁 ふみ

妙に甘ったるい、子供に対するような口調でジョージが囁いた。

「恥ずかしいんだよな？ 俺が好きだって言っても、ほいほい応じたらいけないと思ってるんだろ。雨瀬は清楚系だ。俺も、そこがいいと思ってる。でもこんだけ待ってやったんだ、そろそろ頷いたほうがいい」

的外れすぎる勝手なことを得意げに言うジョージが恐ろしかった。この人にはなにを言っても通じない、と悟って、雨瀬は首を横に振った。

「あなたとはおつきあいできません。こういうことは、もう最後に——」

「ふざけるな！」

爆発するような怒声に身体が硬直する。ジョージは離れたかと思うと、乱暴に雨瀬の手を引いた。

「来い。どうせ処女だろ、一回やればおまえだって、」

「子供の前で、教育に悪い真似は謹んでくれたまえ」

よく響く声が割り込んで、ジョージも雨瀬も振り返った。数メートル離れた場所で、ラトフォートン公爵が娘を抱いて立っている。ジョージの顔を見ると、呆れたように片眉を動かした。

「またきみか。昨晚醜態を晒しただけでは足りなかったのかい？」

「あ……あんたには関係ないだろう」

怯みかけたジョージは、強がるように胸を張った。

「俺はこいつに話があるだけなんだ。今日は邪魔しないでもらう」

「そうはいかないな。この子が泣いて困っていてね」

公爵は抱っこしたマチルダを見つめる。彼女の頬や目には、たしかに泣いた形跡があった。幼い子供と公爵、それから雨瀬を見比べて、ジョージはチツ、と舌打ちした。

「なんだよ、金がないって、ガキ作ったせいだよ」

忌々しげな口調は不穏な響きで、雨瀬は竦んだまま彼を盗み見た。苛立った表情は今にも八つ当たりをしそうだ。怒鳴られるか、と思ったが、それより早く公爵が呼んだ。

「早く戻ってきてくれ。子供に泣かれると私もつらい」

公爵はジョージの勘違いを利用するつもりらしい。雨瀬は数秒迷い、小走りに公爵のほうに駆け寄った。女の子がほっとしたように手を伸ばしてきて、抱きとめるとすすり上げてしがみついた。ふにやりとやわらかいのに重たい身体は熱いほどだ。

ジョージは唾を吐いて踵を返した。

「痴話喧嘩に巻き込みやがって」

完全に勘違いされている。雨瀬はそわそわと公爵を見上げたが、彼はかるくウインクして、雨瀬の背中に手を添えた。

「研究室までマチルダを抱っこしていってくれるかな」

「わかりました」

通ってきた研究棟の脇を戻り、建物の中に入る。薄暗い廊下で一度振り返り、ジョージが後ろにいないことを確かめると、ようやく身体の芯から力が抜けた。

「助けてくださってありがとうございました。でも、どうしてあそこに？」

「マチルダがぐずってね。さっきの人に会いたいとごねるから、困っていたんだ。そうしたら窓から、男がきみの行く手を遮るのが見えた。昨晚の男だと、すぐにわかったよ」

上だよ、と声をかけて、公爵は階段を上がる。

「余計なお世話かとも思ったんだが、マチルダのこともあったから、出ていった。間にあってよかった」

「……助かりました」

雨瀬は重たくなってきたマチルダを抱き直した。公爵は二階に上がると、廊下を曲がってすぐのドアを開けた。ドアの横には美術科のプレートと、ラファエル・ベイカーという名前の札がかかっている。先に入るよう促され、雨瀬は中へ足を踏み入れた。

絵画や大きな画集、書籍、大小さまざまな箱で、雑然とした部屋だった。部屋の主らしき人物は、長い髪を無造作にくくった、公爵と同年代の男性だ。雨瀬を見ても興味がなさそうな無表情で、机に座ったままパソコンに向き合っている。

「とりあえず座って。マチルダはけっこう重いだろう」

公爵は応接セットのソファを指差すと、自分は奥側に腰を下ろした。雨瀬は彼の向かいに座り、膝にマチルダを乗せて顔を覗き込んだ。

「目、赤くなっちゃったね。お顔拭こうか」

マチルダは雨瀬のパーカーを握ったまま離さない。それでもこっくりと頷くので、デイパックからハンカチを出して拭いてやる。泣いていたせいか呼吸は浅めで、ときどき小さく咳をしていた。

「この子の飲み物はありますか？ 喉が渴いてると思います」

「飲み物？ ……ああ、そういえば、朝水筒を持たされたんだった」

じっと見ていた公爵が腰を浮かせる。革の鞆から取り出された、薄紫色の水筒を開けてマチルダに持たせると、彼女は待ちかねていたように口をつけた。ごくごく飲んで、はあ、と可愛らしいため息をつく。ちらりと雨瀬を見上げると、こらえきれないようにこっとした。

「ありがとうございました」

素直な表情が愛くるしくて、雨瀬は髪を撫でてやった。

「僕こそ、会いたいって言ってくれてありがとう。マチルダのおかげで助かったよ」

「マチルダ、いいこ？」

「うん」

微笑めば、マチルダはきゅっと抱きついてくる。

「あのね、マチルダ、すき」

「好きって、僕のこと？」

「そうなの。やさしい。おにんぎょと、マチルダ、どっちも。それから……うんとね、えっと、にてる」

たどたどしい言葉づかいで一生懸命話してくれるのも愛おしい。雨瀬は彼女にハグを返した。

「優しいって思ってくれたんだね、嬉しいな。似てるのはお友達？」

「んー……？ うん。なかよし」

「きみ、子供に慣れてるんだな。私なんか、マチルダがなにを言いたいのか理解するのも大変なんだが」

公爵が感心したように呟いた。

「昔、よく年下の子の面倒を見ていたんです。マチルダ、おしゃべり上手だと思いますよ。まだ三歳くらいでしょう？」

「ああ、三歳だ。きみは兄弟が多かったの？」

「いえ、養護施設にいたんです。年長の子は自然と下の子の世話をするようになっちゃうんですよ。頼られたり慕われたりすると可愛くて」

雨瀬はグリーンデイル夫妻と血が繋がっていないのは見た目ですぐにわかるから、さりげなく説明するのは慣れていた。だが、公爵は決まり悪そうな顔をした。悪いことを聞いた、と思っ

ているのが伝わってきて、微笑を返す。

「悪い思い出じゃないから、聞いてもらっても平気です。僕、けっこう運がよくって。施設もいいところだったし、引き取ってくれた両親もすごく優しいんです」

そうか、と口ごもる仕草に、正直な人なのだなと思う。誰とも真剣につきあわず遊んでばかり、なんて苦手なタイプなのに、話していると嫌いになれない。

(きつともてるんだろうな)

ふとそんなことを思って、慌てて目を伏せた。その耳に、公爵の声が飛び込んでくる。

「だったらちょうどいいかな。きみ、アルバイトを探してるんだろう？ 仕事を引き受けてくれないか？」

「仕事？」

聞き返して、すぐに察しがついた。

「ベビーシッターですか？」

「半分はね」

よくわからないことを言って、公爵はため息まじりに肩を竦めた。

「マチルダは姉の子なんだ。数か月、長くて半年の約束で私が預かることになっている」

「——そうだったんですね」

テスが知ったらちょっと残念がりそうな情報だ。

「だが、私は正直子供が苦手だ。もちろん、育てた経験もない。しかもマチルダは人見知りみたいで、昨日はうちの家政婦をいやがって泣いた。家政婦は初日だからですよと笑っていたが、家で泣かれるとこちらの気が滅入る。だいたい、私は預かりたくなかったんだ」

仕草にも声にも、言葉どおり面倒だと思っているのが表れていて、雨瀬は複雑な気持ちになった。嫌いになれない、けれど、やっぱり好きでもない。マチルダは自分の話なのができるのだろう、黙って身体を硬くしている。

「子供の前で、預かりたくなかったなんて言うのはよくないと思います。マチルダが遠慮しちゃうじゃないですか」

安心させたくてマチルダの背中を撫でながら、我慢できずに睨むように公爵を見つめると、彼は拗ねたようにそっぽを向いた。

「嘘を言ったって仕方ないだろう。私も不本意だし、彼女だって不本意だと思う。だが姉に、ほかに預けられる人間がいなくてと言われてしまったんだ。預かった以上ほったらかしにもできない。私は平日のうち三日は会社の仕事、二日はこの研究室でラファエルを手伝っている。会社の仕事は家でもできるし、研究室は一緒に連れてくればいいのかとも思ったが、面倒がみられる人間がいなくてだめだということが、今日よくわかった。だからきみにやってほしい仕事の半分は、ベビーシッターだ」

ベビーシッターは学生のアルバイトの定番だが、相場は安い。それで雨瀬は仕事の候補から外していたのだが、マチルダの様子と公爵の態度を見てみると、断る言葉を口にするのは躊躇われた。かといって即答できないのは、「半分は」と強調されたせいだ。

「——残りの半分は？」

なにを言われるのだろう、と身構えた雨瀬に、公爵はひどく魅力的な笑みを浮かべた。

「私の婚約者になってほしい」

「……………すみません、よくわかりませんでした」

婚約者、と言われた気がしたが、聞き間違いだろう。似た単語があったっけ、と首をかしげると、公爵は丁寧に言い直した。

「婚約、つまり将来結婚するという約束を、私としてほしいんだ」

「——」

一瞬、頭が真っ白になった。それから、どうしよう、と焦る。昨日の運命がどうかというのは冗談だと自分で言ったのに、やっぱり本気だったのだろうか。彼が今までつきあってきたのはセレブリティの美男美女ばかりだったから、かえって雨瀬みたいな普通の人間が新鮮で、惹かれてしまったとか？

（で、でも、お互いよく知らない者同士で急に婚約なんて——）

「もちろん、本当に結婚しろとは言わない。半年間だけ、婚約者でいてくれればいい。正式な書面を交わしたりもしない。上辺だけ、恋人のふりをするだけだ。ちょっとしたお芝居だと思ってくれ」

「……え？」

ぼうっと熱くなりかけた顔に、冷水を浴びせられた気がした。雨瀬は数度まばたきして、微笑んだままの公爵を見つめた。

「半年、ふりだけ、ですか？」

「もう少し短くてもいいのだが、マチルダを預かるあいだ婚約済みの恋人として振る舞ってもらったほうが説得力があるからね」

公爵は立ち上がると壁際へ行き、サーバーから紅茶を注いだ。カップを二つ持って戻ってくると、雨瀬の前にも置いてくれる。

「自己紹介がまだだったが、私はケアリー・ウィンターチェット。ラトフォートン公爵だ。私と我が一族に関する噂は知っている？」

「……少し」

「少しでも知っていれば、聞いたことがあるだろう。ウィンターチェット家は呪われた一族などと言われていて、私はどうしようもない遊び人だ」

コメントしづらい自嘲をしてみせて、公爵は優雅に紅茶を飲んだ。

「生涯真実の愛なんてものには巡りあえそうもないが、けっこう楽しんでいるよ。だが、お節介な人間はどこにでもいる。今度、断りづらい相手からある女性を紹介されることになっているんだ。私は誰とも結婚をする気はないからもちろん断るが、食い下がられても面倒だ。実は好きな相手がいて婚約しましたと言えば、断るのに角が立たない」

なんて自分勝手なんだろう、と雨瀬は呆れてしまった。お見合いがいやだから、よく知りもしない人間に婚約者のふりを頼む、なんて最低だ。断りづらい人物からの紹介ならなおのこと、誠実に自分の気持ちや考えを伝えればいいのに。その人だって、お節介を焼くほど公爵のことを思っているなら、無理強いはしないはずだ。

「僕は、そういう嘘はつきたくありません」

「きみが嘘をつく必要はないよ。誰かに聞かれたら、適当に笑って否定しないでくれればいい。それに、マチルダのシッターは、婚約者のふりをしてくれる相手に頼みたい。マチルダの面倒を見てくれるくらい親しい相手じゃないと、婚約者として説得力がないだろう？」

つまり子供まで利用するってことじゃないか、と思って、雨瀬の中の公爵への評価がさらに下がった。

(マチルダは、あなたがお見合いを断るための道具じゃない)

そう言ってやりたくて公爵を睨んだが、彼は少しもこたえていないようだった。

「いやなら両方断ってくれていい」

そう言われても、マチルダの前で断りますとは言いづらかった。初対面の雨瀬に「すき」と素直に言ってくれるマチルダの寂しさはどれほどだろう。親元を離れて、自分のことを愛していない大人と暮らすのは、不安に決まっていた。

ひとりぼっちは寂しい。大人になったってつらいのだ。

きみのことが嫌いなんじゃないんだよ、と伝えたくて、何度もマチルダの頭を撫でる。彼女のほうもきゅっと抱きついてきて、いっそう公爵が許せなくなった。

公爵は余裕たっぷりに微笑んでみせる。

「非常識なことを頼んでいるのはわかっているからね、契約金として、きみが望む額を払う」

「望む額って……僕が五万ポンドとか言ったらどうするんですか」

「五万？ いいとも」

ふっかけたつもりが簡単に額かれ、雨瀬はぐっとつまった。ほんの少しだけ気持ちが揺らぐ。五万ポンドはありえないけれど、もし一万ポンドでももらえれば、一気に楽になる。

（で、でも、お金につられて不誠実な嘘の共犯になるなんて——）

「やだ？」

小さな小さな声で、マチルダが聞いた。青い目をいっぱい潤ませて、不安そうに雨瀬を見上げてくる。

「マチルダのこと、きれい？」

「……マチルダ」

嫌いじゃないよと口で言っても、二度と会えなければこの幼い女の子が傷つくのはわかっていた。数秒彼女と見つめあい、雨瀬はため息をついた。

「わかりました、引き受けます。でも、講義もほかのアルバイトもあるので、毎日マチルダにつきっきりになることはできません。保育園に預けることも検討していただけますか？」

「ああ、それはもちろん。すぐに手配しよう」

「それと、僕は自分からは絶対に、あなたの婚約者だとは言いません。お金はマチルダのシッター一代だけでけっこうです」

「十分だよ。報酬額については半年後、終わったときにでも話しあって決めよう」

にっこりして、公爵は手を差し出してきた。

「私のことはケアリーと呼んで。きみの名前は？」

「——雨瀬です。雨瀬・グリーンデイル」

手を握り返して、すぐに離れた。露骨に嬉しそうな公爵の表情がいやだった。思い通りにいった、とでも言いたげな様子なのだ。めったにないことに気持ちがささくられて、目に力を込めて公爵を睨む。

「呼び方くらいは、言われたとおりにします。でもこれだけははっきりさせておきます。僕は婚約者のふりなんてよくないと思うし、反対です」

どうしても裏切られたような気がしてしまう。第一印象がよすぎた分、遊び人だったと知ってがっかりした上に、お金を積んで嘘をつかせるような人間で、幼い姪にもひどいことを言う男だったなんて——むかむかする。

公爵は面白そうに雨瀬を眺めた。

「そんなにふりがいやなら、正式に婚約しても私はかまわないんだけどね」

「余計に駄目です。——それから」

言うべきか迷ったが、ジョージの二の舞はごめんだ、と思って、雨瀬は告げた。

「婚約者のふりをするとしても、ハグするとか……さ、触るとか、恋人同士みたいなことは、絶

対にしませんので」

「恋人同士みたいなこと、ね」

くすくす笑って公爵は立ち上がった。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<https://www.fwinc.jp/daria/>